

序章……………五

第I章 中の品の女性……………三

 第1節 空蟬……………三

 第2節 夕顔……………三

 第3節 末摘花……………三

第II章 紫のゆかりの女性……………六

 第4節 桐壺更衣と母……………六

 第5節 藤壺……………三〇

 第6節 紫の上……………三四

 第7節 女三の宮……………四〇

第III章 上の品の女性……………四

 第8節 葵の上……………四

 第9節 朧月夜の君……………四

 第10節 花散里……………五

 第11節 六条御息所……………五

 第12節 秋好中宮……………五

第IV章 玉鬘十帖の女性……………五

 第13節 玉鬘……………五

 第14節 近江の君……………六

 第15節 鬚黒北の方……………六

 第16節 真木柱……………六

第V章 明石一族の場合……………七

 第17節 明石の君……………七

 第18節 明石の入道……………八

 第19節 明石の尼君……………九

 第20節 明石の姫君……………九

 第21節 姫君の乳母……………九

第VI章 夕霧に係わる女性……………七

 第22節 雲居雁……………七

 第23節 一条御息所……………七

 第24節 落葉の宮……………七

第VII章 光源氏の場合……………三

 第25節 光源氏……………三

第VIII章 正篇の男性……………六

終章……………三

 あとがき……………三

 索引……………三

第IX章 続篇の男性……………三

 第31節 竹河卷……………三

 第32節 八宮……………九

 第33節 匂宮……………三〇

 第34節 薫……………三二

第X章 宇治十帖の女性……………三

 第35節 大君……………三

 第36節 弁の尼……………五

 第37節 中の君……………五

 第38節 中将の君……………六

 第39節 脇役たち……………六

 第40節 浮舟……………七

凡例

- 一 『源氏物語』本文の引用は日本古典文学全集本（小学館）により、巻・頁数を示したが、文中で明らかな場合は省いたところもある。表記は私に改めた場合もある。
- 二 古注釈類は、『源氏物語古注集成』（おうふう）所収のものを使用した。未所収のものは、『紫明抄河海抄』（角川書店）、『増註湖月抄』（講談社学術文庫）、及び、『本居宣長全集 第四巻』（筑摩書房）所収の『源氏物語玉の小櫛』を使用した。
- 三 各節ごとに、筆者のいう「わが身をたどる表現」の用例一覧を置いた。各用例の示し方は、整理番号、本文、文章の区別（「地」は地の文、「心」は心内語、「会」は会話文、「消」は手紙文、「歌」は和歌であることを示す）、鍵括弧の中は「話主↓受け手」、用例が独詠歌の場合は「独詠歌」、巻名、頁数の順になる。
- 四 初出論文名と掲載誌名は、あとがきに記した。
- 五 索引は、総合索引として巻末においた。

序章

本書は、『源氏物語』に見られる「わが身をたどる表現」のほぼ全用例を、登場人物ごとに表現性という観点で検討することを目的にしており、単一の主題で貫かれている。

この「わが身をたどる表現」とは、膠着語とされる日本語の性格に着目しての筆者の造語で、この命名は内容的なかわりはないが中世物語の『我が身にたどる姫君』になぞらえている。日本語は、幾重にも続く修飾語をある一語に収束させて凝集性の強いひとまとまりの語句を容易に形成することができるが、そうした膠着性・凝集性の強い表現のうちで、「身」という語とそれにかかる修飾語全体で形成される語句を「わが身をたどる表現」と仮に名付けてみたわけである。

この「わが身をたどる表現」を記号的に示せば「：身」と表示できる形のもので、具体的には「うき宿世ある身」「思ひのほかなる身」などという表現形式を念頭に置いている。前者の場合、「うき宿世ある」という修飾語が「身」一語を修飾しており、修飾・被修飾の関係で成立した「うき宿世ある身」という語句全体で、膠着性・凝集性の強いひとまとまりの表現になっていると認定できる。そして、このひとまとまりに構成された「：身」表現の形式で、当該人物の多種多様な身意識や自己認識が固有にたどられているとすることができる。したがって、「：身」の形式を「わが身をたどる表現」として捉え、その表現性を考える意義があると思われる。

身に対する意識、わが身や他者の身がどのようなかといった場合に、表現の形としては、記号的に「身：」と「：身」との両者の場合が可能である。「身：」の形は「身」にかかる修飾語がなく、「：身」には「身」にかかる一

第1章 中の品の女性

まず最初は、中の品の女性たちに見られる「わが身をたどる表現」を扱うことにしたい。登場人物は各章に分けてグループピングしたが、ここでは、空蟬・夕顔・末摘花の三人が検討の対象になる。末摘花を中の品に入れるのは問題があるが、ここでは扱わず、別に章を立てた。夕顔の遺児玉鬘なども別章である。この章では、空蟬において「わが身をたどる表現」は特徴的であり、中の品の人妻として光源氏とかかわったことで形成される身意識が連続している。残りの女性には特徴的な用例がそれほどないが、それは、人物設定のされ方に身意識がそれほど係わっていないからになる。なお、雨夜の品定め体験談で登場する女性や軒端菝には用例がない。「夕顔」巻に登場する源氏の乳母に二例、「蓬生」巻の末摘花の叔母に一例あるが、掲出は割愛した。

第1節 空蟬

空蟬は、光源氏とたった一回の契りを交わしただけで、その後は求愛拒否の姿勢を明確に打ち出している。古受領の後妻に納まっている境遇、すなわち中の品の身分意識がそうさせているわけだが、拒否が単なる拒否でないところに空蟬の独自性があり、その内面的世界のあり方は「わが身をたどる表現」でも象られ、藤壺あるいは浮舟などときわめて近似した様態が見られる。しかし、玉鬘十帖での用例はなく、空蟬が主題的な重みを持っている「帯木」「空蟬」「関屋」

巻に限られている。用例のすべては、次のようになる。用例の示し方は「凡例」を参照されたい。

〔用例1 空蟬〕

| | | | | | |
|----|------------------------------|---|----------|----|------|
| 1 | 数ならぬ身 | 会 | 〔空蟬↓光源氏〕 | 帯木 | 177頁 |
| 2 | いとかくうき身のほど | 会 | 〔空蟬↓光源氏〕 | 帯木 | 178頁 |
| 3 | いとかくうき身のほどの定まらぬありしなごらの身 | 会 | 〔空蟬↓光源氏〕 | 帯木 | 178頁 |
| 4 | 心得ぬ宿世うち添へりける身 | 地 | | 帯木 | 183頁 |
| 5 | かろがろしき名さへ取り添へん身のおぼえ | 地 | | 帯木 | 184頁 |
| 6 | わが身 | 心 | | 帯木 | 184頁 |
| 7 | いとかく品定まりぬる身のおぼえならで | 心 | | 帯木 | 186頁 |
| 8 | 空蟬の身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな | 歌 | 〔光源氏↓空蟬〕 | 空蟬 | 203頁 |
| 9 | ありしなごらのわが身ならば | 心 | | 空蟬 | 205頁 |
| 10 | うき宿世ある身 | 心 | | 関屋 | 354頁 |

右のように「:身」の形で形成される「わが身をたどる表現」が連続し、また、一定の方向性を持ちつつ多様に変容して展開していく自体の在り方のうちに、空蟬の身に関する内面が象られている。これらの用例は、個々をとってみれば他の人物と同例のものも見出だせるが、その内実と展開のされ方は、空蟬に固有の在り方として認定できる。「身:」の形ではなく、「:身」の形であることによって、その「:」の部分で把握される内実が、空蟬において自己に固有の宿世であるかのように理解されるわけである。具体的に用例に添って見ていきたい。